

愛媛県立医療技術短期大学看護学科卒業生の動向（第2報）

— キャリア形成と本学への要望 —

山 口 利 子, 塩 月 ぬい子, 矢 野 紀 子
徳 永 なみじ, 野 村 美千江, 北 川 博 之

愛媛県立医療技術大学紀要 第4巻 第1号抜刷

2007年12月

愛媛県立医療技術短期大学看護学科卒業生の動向(第2報)

— キャリア形成と本学への要望 —

山口利子*, 塩月ぬい子*, 矢野紀子*
徳永なみじ*, 野村美千江*, 北川博之*

Attitudes of the Nursing Graduates of Ehime College of Health Science(2)

— Their Careers and Demands for Our University —

Toshiko YAMAGUCHI, Nuiko SIOTSUKI, Noriko YANO
Namiji TOKUNAGA, Michie NOMURA, Hiroyuki KITAGAWA

序 文

愛媛県立医療技術短期大学は、保健医療福祉分野において貢献しうる人材を育成することを目的とし、四国で初めての公立医療系短期大学として昭和63年に開学し、平成19年3月をもって閉学を迎えた。

開学当時、看護系大学は10校程度であったが、その後看護を取り巻く環境は医療の高度化・複雑化、社会のニーズの変化などが激変し、平成に入ると看護の大学教育が本格化し、平成18年には大学は140校を超えるまでになり、それに伴い短期大学は大学へと移行し、学校数も減少してきている状況にある。

このような高度化・複雑化が進む医療現場における看護ケアの広がりや看護の質向上を目的とし、専門看護師・認定看護師の資格制度が平成8年から発足し、平成19年7月現在、専門看護師186名、認定看護師3,383名¹⁾と年々増加してきている。

また、日本において増加の一途をたどっている糖尿病患者に対して、熟練した療養指導を行うことのできる糖尿病療養指導士の資格が平成12年度より、また高齢化に対応して平成12年に介護保険制度がスタートし、ケアマネージャー(介護支援専門員)の資格もできた。これらの資格は、医療従事者である一定の条件が満たされていれば取得できるものであり、看護職もこれらの資格を取得し、活躍の場を広げている者が増えてきている。看護職者は、このように専門職人としてのキャリア形成に向けて努力しており、今後ますます個々人のキャリアを形成していく者が増加していくであろう。

同短期大学の卒業生の動向については、平成5年に平成元年度から平成3年度の卒業・修了生309名を対象にした「卒業生・修了生の実態調査報告書—卒業教育の充

実と大学教育発展の手がかりを求めて—²⁾と題して発表されている。次いで、平成15年に平成11・12年度の卒業生とその上司を対象にした「卒業生の臨床実践能力—卒業後2年間の変化—³⁾と題して発表されており、卒業生の就業状況や臨床実践能力および職業キャリア形成について報告してきたが、全卒業生を対象とした調査は行われていない。

そこで、今回閉学を迎えたのを機に、卒業生の職業定着状況や職歴移動、職業意識を明らかにするとともに、卒業生が愛媛県立医療技術大学に対して期待していることを明らかにすることを目的として調査を行った。第1報では、卒業生の就業定着状況や職歴移動、職業意識に関する調査結果を報告した⁴⁾。第2報として、卒業後の進学・資格取得状況や本学に対するニーズについての調査結果を報告する。

研究目的

愛媛県立医療技術短期大学第一および第二看護学科卒業生の進学状況と卒業後の資格取得状況、本学に対する要望について調査を行うことにより、卒業生のキャリア形成の実態を把握し、キャリア形成にかかわる本学への期待を明らかにすることを目的とする。

研究方法

1. 研究対象：愛媛県立医療技術短期大学看護学科卒業生1,561名
(内訳) 第一看護学科卒業生 747名
第二看護学科卒業生 814名
2. 調査期間：平成18年9月22日～10月31日

*愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科

3. 調査方法：郵送留め置き法による自記式質問紙調査

4. 調査内容

- ① 基本属性・年齢・学科・卒業年・出身地（県内・県外）
- ② 職業定着：現職の有無・勤務場所・離職理由・再就職意志
- ③ 職務満足：業務・自律・環境・人間関係・給料への満足
- ④ キャリア形成：卒業後の取得資格，研究活動，自己研鑽
- ⑤ 本学への要望：相談支援，学内施設の開放など本学へ要望することについて16項目を設定し，選択肢は大変思うから全く思わないまで4択とした。

5. 倫理的配慮：プライバシーを保護するために無記名とし，依頼文において本研究の趣旨と目的を記載した。また研究への参加は自由であること，調査内容は研究目的以外には使用しないこと，個人の特定はしないこと，調査用紙は研究終了と同時に破棄すること，研究協力に同意される場合に調査表を郵送してほしいことを説明した。学科・卒業年と性・年齢の記載によって個人が特定されることのないよう取扱いに注意し，個別解析は行わず，調査表は研究終了と同時に裁断廃棄によって処理し，倫理的配慮につとめた。

6. 関係者協力：卒業生への配布は，愛媛県立医療技術短期大学同窓会（木蓮会）および事務局に趣旨と目的を説明し，同窓会からの依頼文書同封の上で登録住所に調査票を郵送した。同窓会に現住所の登録がない卒業生は大学事務局の協力によって，入学時の保護者の現住所に調査票の郵送を依頼した。

7. 用語の定義：「医療系分野」とは看護師・助産師・保健師のいずれかの資格を活かして従事している職業分野全般のことを言う。また，産休育児休暇中の場合も就労に含めた。

結 果

1. 対象者の概要

卒業生1,561名のうち現住所に郵送できたのは1,412名であった。回答数は488(回収率34.6%)，有効回答は483であった。本報で分析対象とした483名を教育課程別にみると，第一看護学科254名(52.6%)，第二看護学科229名(47.4%)であった(表1)。現在，医療系分野で勤務している人は372名(77.0%)であり，第一看護学科190名(74.8%)，第二看護学科182名(79.5%)であった。

表1 対象の概要

	人数	20-24歳	25-29歳	30-34歳	35歳以上
第一看護学科	254 (52.6)	48	80	79	47
第二看護学科	229 (47.4)	55	80	62	32
合計	483 (100.0)	103 (21.3)	160 (33.1)	141 (29.2)	79 (16.4)

2. キャリア形成について

1) 卒業後の進学状況(表2)

短大卒業後に，137名(28.4%)が進学していた。137名の進学先は，保健師養成施設48名(35.0%)，大学の看護課程28名(20.4%)，助産師養成施設24名(17.5%)の順で多く，進学者の73.0%を占めていた。また，大学院へ進学した者は全て看護系大学院で11名(8.0%)であった。学科別の進学状況は，第一看護学科254名中99名(39.0%)，第二看護学科229名中38名(16.6%)で，第一看護学科の進学率は第二看護学科の約2.4倍であった。

年齢別では，25%から33%の進学率であり，年齢が高くなるほど進学率が高くなる傾向があった。

表2 進学の状況

進学先\学科・年齢別	第一看護学科 n=254	第二看護学科 n=229	人数(%)			
			20~24歳 n=103	25~29歳 n=160	30~34歳 n=141	35歳~ n=79
大学-看護課程	22	6	9	9	7	3
大学-看護課程以外	5	5		2	4	1
看護系大学院	8	3	1	1	1	8
保健師養成施設	37	11	11	13	18	6
助産師養成施設	16	8	4	12	9	2
保健師・助産師養成施設	5	1	2	2	1	1
その他	3	4		2	2	3
不明	3				1	2
進学あり集計(%)	99 (39.0)	38 (16.6)	27 (26.2)	41 (25.6)	43 (30.5)	26 (32.9)
進学なし集計	155 (61.0)	190 (83.0)	75 (72.8)	119 (74.4)	98 (69.5)	53 (67.1)
不明		1 (0.4)	1 (1.0)			

2) 卒業後の資格取得状況

短大卒業後に144名(29.8%)が何らかの資格を取得していた。その内訳は、保健師・助産師・養護教諭など進学して取得した資格とケアマネージャー、認定看護師(救急看護・看護管理者・集中ケア・皮膚・排泄ケア)、糖尿病療養指導師など働きながら取得した資格であった。学科別では第一看護学科254名中92名(36.2%)、第二看護学科299名中52名(17.4%)であった。進学の有無別では、進学した137名のうち資格を取得した者は105名(76.6%)、進学していない346名のうち39名(11.3%)が資格を取得していた。

複数の資格を取得したのは144名中125名(25.9%)で、資格取得者の86.8%を占めており、平均資格取得数1.4、5つの資格を取得した者も1名いた。

取得した資格で多かったのは、保健師68名(34.2%)、ケアマネージャー41名(20.6%)、助産師24名(12.1%)、養護教諭23名(11.6%)、衛生管理者17名(8.5%)などであった。第一看護学科では保健師が、第二看護学科

ではケアマネージャーが最も多かった(表3)。年齢別では、20-24歳が20.4%と最も低く、20-25歳26.3%、30-34歳40.4%、35歳以上では48.1%を占め、年齢が高くなるにつれて資格取得の割合が高くなっていった(図1)。

表3 卒業後の資格取得状況(学科別)

資格の種類\学科	人数(%)		
	第一看護学科 n=134	第二看護学科 n=65	合計 n=199
保健師	53 (39.6)	15 (23.1)	68 (34.2)
ケアマネージャー	20 (14.9)	21 (32.3)	41 (20.6)
助産師	17 (12.7)	7 (10.8)	24 (12.1)
養護教諭	17 (12.7)	6 (9.2)	23 (11.6)
衛生管理者	13 (9.7)	4 (6.2)	17 (8.5)
糖尿病療養指導士	2 (1.5)	4 (6.2)	6 (3.0)
認定看護師	2 (1.4)	3 (4.5)	5 (2.5)
その他	10 (7.5)	5 (7.7)	15 (7.5)

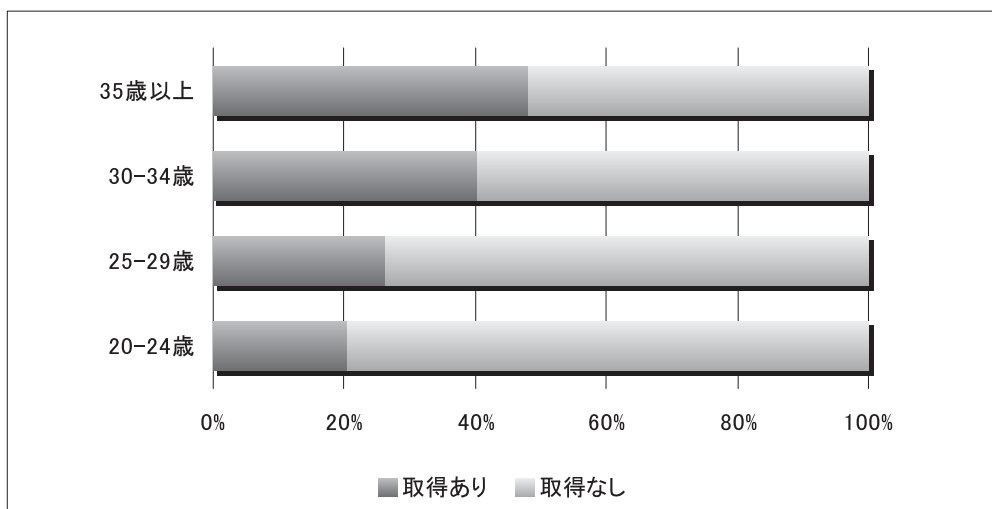


図1 資格取得の状況(年齢別)

3) 就業者の資格活用状況

卒業後に何らかの資格を取得した144名中115名(79.9%)が現在就業していた。取得した資格をどのように活用して働いているのかをみると、保健師の資格を取得して現在就業している68名中30名(44.1%)が保健師、24名(35.3%)が看護師として、助産師では24名中17名(70.8%)が助産師として勤務していた。また、看護師の資格をベースに講習会などで認定資格が得られる糖尿病療養指導士・認定看護師では、9名中6名(66.7%)が看護師として、ケアマネージャーでは、26名中13名が(50.0%)が看護師として、5名(19.2%)が保健師として勤務していた。

4) 学会の所属状況について

何らかの学会(日本看護学会を除く)に所属している者は467名中36名(7.7%)で、第一看護学科246名中21名(8.5%)、第二看護学科221名中15名(6.8%)であった(表4)。複数の学会に所属している者は36名中14名(38.9%)で、最大9つの学会に所属している者も1名いた。学会に所属している者は、1人平均1.7の学会に所属しており、学会の種類も看護系の学会にとどまらず、医学系・保健系などで、学会の規模も国際・全国規模から地方規模の学会まで、多種多様な学会に所属している状況であった。所属している人数の多かった学会は、日本看護研究学会6名、日本看護科学学会

5名、日本助産学会4名であった。

表4 学会の所属状況

学会所属\学科	人数 (%)		
	第一看護学科 n=246	第二看護学科 n=221	合計 n=467
有り	21 (8.5)	15 (6.7)	36 (7.7)
なし	225 (91.5)	206 (93.2)	431 (89.2)

5) 臨床での研究経験

短大卒業後に看護研究発表や論文を掲載した者は、483名中203名(42.0%)であった。その内容は、「施設内での発表」169名(35.0%)、「地方での発表」87名(18.0%)、「全国での発表」49名(10.1%)で、発表の場が地方・全国へと広がると半減していた(表5)。1人あたりの発表平均回数は、施設内1.7回、地方での発表1.6回よりも、全国での発表が2.0回と若干ではあるが多く、最も多く発表した者は10回であった。

表5 研究発表状況

	人数 (%)	回数	平均 (SD)
施設内	169 (35.0%)	279	1.7±1.2
地方	87 (18.0%)	135	1.6±1.2
全国	49 (10.1%)	100	2.0±2.2

また、論文発表をした者は28名(5.8%)で、掲載論文数は66編、1人当たりの平均掲載編数は2.4編、最

多11編を掲載した者もいた。論文発表した者は全員が全国レベルで発表した経験のある者(全国発表者の57.1%)であった。

学科別では、第一看護学科254名中施設内82名(32.3%)、地方52名(20.5%)、全国32名(12.6%)、第二看護学科229名中施設内87名(38.0%)、地方35名(15.3%)、全国(7.4%)であった(表6)。

表6 研究発表状況(学科別)

発表の場\学科	人数 (%)		
	第一看護学科 n=254	第二看護学科 n=229	総計 n=483
施設内	82 (32.3)	87 (38.0)	169 (35.0)
地方	52 (20.5)	35 (15.3)	87 (18.0)
全国	32 (12.6)	17 (7.4)	49 (10.1)

約70%は看護師として、約20%が保健師として発表しており、年齢別では、「30~35歳」が約40%と最も多く、「20~24歳」が最も少なく10%以下であった。

6) 学会等への主体的参加状況

学会等へ主体的に参加するかどうかを4段階で問うたところ、「当てはまる」54名(11.3%)、「やや当てはまる」187名(39.2%)、「あまり当てはまらない」120名(25.2%)、「当てはまらない」116名(24.3%)で、約50%の者が主体的に参加していると答えた(図2)。

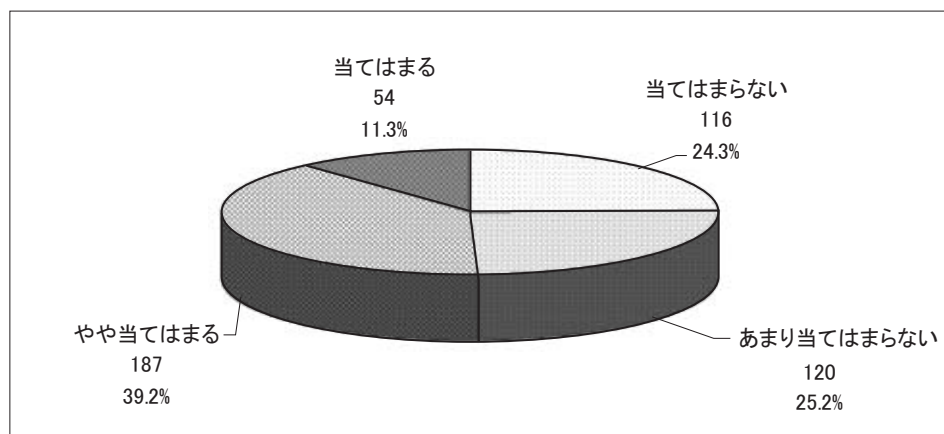


図2 学会などへの主体的参加状況

7) 専門誌の購読状況

専門誌の購読状況は、定期購読している者483名中72名(14.9%)、時々購読している者228名(47.3%)、全く購読していない者182名(37.8%)で、約60%が雑誌を購読していた。また、学会に所属している者と研究発表を行った者の70%以上は雑誌を購読しており、論文の掲載がない者と学会に所属していない者の約40%は購読していなかった。

8) 今後取得したい資格等

今後、資格取得を考えている者は482名中163名(33.8%)で、第一看護学科253名中86名(34.0%)、第二看護学科229名中75名(33.3%)であった。希望する資格として最も多いのは、ケアマネジャー57名(35.0%)で全体の11.8%を占め、次いで認定看護師38名(23.3%)で全体の7.9%、保健師17名(10.4%)で全体の3.5%となっていた。続いて、専門看護師と糖尿

病療養指導士が11名(6.7%), 精神保健福祉士9名(5.5%), 助産師8名(4.9%), 養護教諭6名(3.7%), 認定看護管理者3名(1.8%), その他9名(5.5%)であった。34名が複数の資格の取得を予定しており, 最高4つの資格取得を予定している者もいた。

年齢別では, 25歳以下が43名(41.7%)と最も多く, 年齢が高くなるにつれ漸減傾向がみられたが, 35歳以上において再び資格の取得を目指す者が多くなっていた(表7)。

今後, 進学を希望している者は483名中60名(12.4%)で, 第一看護学科254名中44名(17.3%), 第二看護学科229名中16名(7.0%)であった。進学を希望している60名のうち, 大学21名(35.0%), 修士課程13名(21.7%), 博士課程8名(13.3%), 専攻科等18名(30.0%)であった(表8)。進学希望先を, 看護系・非看護系と比較すると約3対1であった。

3. 卒業生の本学に対する期待とニーズ

16質問項目中, 「支援窓口の開設」, 「進路相談」, 「実践活動の支援」, 「リカレント教育」, 「学習会の開催」, 「看護の情報発信」, 「公開講座の増設」, 「図書館の蔵書の充実」の8項目が最頻値3(やや思う)であった。「図書館の休日開館」と「図書館の開館時間延長」が最頻値4(大変思う)であり, 「研究支援」など6項目が最頻値2(あまり思わない)であった。平均値は高い順に「看護の情報発信」(3.2), 「図書館の休日開館」(3.1), 「図書館の開館時間延長」(3.0), 「進路相談」(2.9), 「図書館の蔵書の充実」(2.9)であった。平均値の低い項目は, 「夜間・休日の事務窓口開設」(2.3), 「大学の施設開放」(2.4), 「大学活動の広報」・「大学院の設置」・「共同研究」(2.5)であった(表9)。

現在, 医療系分野で就業中の者は本学に対して, 「看護の情報発信」, 「研究支援」, 「図書館の休日開館」, 「リカレント教育」などを要望する割合が高かった。特に, 県内の医療系分野で就業している場合には, 期待度が高い傾向がみられた(表10)。

表7 今後の資格取得予定

取得予定\学科・年齢別	人数 (%)					
	第一看護 n=253	第二看護 n=229	20~24歳 n=103	25~29歳 n=160	30~34歳 n=141	35歳~ n=79
予定あり	86(34.0)	75(33.2)	43(41.7)	58(36.3)	36(25.5)	26(32.9)
保健師	15	3	11	4	3	0
助産師	4	3	3	3	1	0
養護教諭	2	1	2	1	0	0
専門看護師	4	5	2	3	2	2
認定看護師	14	21	13	10	4	8
認定看護管理者	2	1	0	0	2	1
糖尿病療養指導士	3	4	1	4	1	1
ケアマネジャー	24	20	6	23	11	4
精神保健福祉士	6	2	0	3	3	2
その他	13	16	5	7	9	8

表8 今後の進学予定

		人数 (%)	進学の予定あり			
			計 (%)	大学	修士課程	博士課程
合計	(n=483)	60 (12.4)	21	13	8	18
学科	第一看護学科 (n=254)	44 (17.3)	14	12	8	10
	第二看護学科 (n=229)	16 (7.0)	7	1	0	8
年齢 (歳)	20~24 (n=103)	12 (11.7)	3	2	2	5
	25~29 (n=160)	20 (12.5)	6	5	1	8
	30~34 (n=141)	15 (10.6)	9	2	0	4
	35~ (n=79)	13 (16.5)	3	4	5	1

表9 本学への期待

	大変思う	やや思う	あまり思わない	全く思わない	合計	平均 (SD)
支援窓口の開設	83(17.2)	239(49.6)	150(31.1)	10(2.1)	482(100.0)	2.8(0.7)
進路相談	67(13.9)	208(43.1)	189(39.1)	19(3.9)	483(100.0)	2.7(0.8)
研究支援	18(3.7)	134(27.9)	219(45.5)	110(22.9)	481(100.0)	2.9(0.8)
実践活動の支援	68(14.8)	233(48.6)	162(33.8)	16(3.3)	479(100.0)	2.8(1.2)
リカレント教育	88(18.3)	233(48.4)	148(30.8)	12(2.5)	481(100.0)	2.8(0.7)
学習会の開催	87(18.0)	229(47.3)	154(31.8)	13(2.9)	483(100.0)	2.8(0.8)
共同研究	61(12.7)	166(34.4)	232(48.1)	23(4.8)	482(100.0)	2.5(0.8)
大学院の開設	67(13.9)	131(27.2)	247(51.2)	37(7.7)	482(100.0)	2.5(0.8)
看護の情報発信	171(35.5)	232(48.1)	71(14.7)	8(1.7)	482(100.0)	3.2(0.7)
行事・活動の広報	44(9.1)	169(35.0)	241(49.9)	29(6.0)	483(100.0)	2.5(0.7)
図書増冊	128(26.6)	175(36.4)	158(32.8)	20(4.2)	481(100.0)	2.9(0.9)
図書館の休日開館	192(39.8)	150(31.1)	123(25.5)	18(3.7)	483(100.0)	3.1(0.9)
図書館の開館時間の延長	176(36.3)	140(29.0)	149(30.9)	18(3.7)	482(100.0)	3.0(0.9)
大学施設の開放	63(13.1)	97(20.1)	275(57.1)	47(9.8)	482(100.0)	2.4(0.8)
公開講座の増設	83(17.3)	195(40.5)	182(37.8)	21(4.4)	481(100.0)	2.7(0.8)
夜間・休日の事務窓口	36(7.5)	112(23.2)	288(59.8)	46(9.5)	482(100.0)	2.3(0.7)

表10 本学への期待 (就業別)

本学に期待する内容	現在、医療系で就労中 (n=372)			現在、 就労なし (n=111)
	小計	現在の勤務場所 県内 (n=243)	県外 (n=126)	
支援窓口の設置	66.1	68.7	60.3	65.8
看護の情報発信	82.5	86.0	75.4	82.0
実践活動の支援	61.8	64.2	57.1	61.3
リカレント教育	66.4	70.0	59.5	63.1
合同学習会	63.2	68.7	52.4	69.4
研究支援	70.4	78.2	55.6	58.6
共同研究	47.6	50.2	42.9	41.4
進路相談	57.0	58.0	54.8	54.1
大学院の設置	38.4	36.2	42.9	47.7
図書館の蔵書の充実	61.8	70.3	44.4	62.2
図書館の休日開館	72.3	81.5	54.0	62.2
図書館の開館時間延長	67.2	75.3	50.8	55.0
公開講座の増設	58.3	66.7	42.9	51.4
大学活動の広報	43.0	46.1	35.7	45.0
大学の施設開放	32.5	32.5	32.5	33.3
夜間・休日の事務窓口	29.8	32.1	25.2	31.5

その他、自由意見をみてみると、恩師とゆっくり話したいやメールなどを活用して先生方との交流を深めたいなど、教員との交流を希望している意見があった。また、臨床現場と短大で学んできたこととのギャップに悩んだので、ギャップが減少するように指導してほしい、臨床

に役立つような技術の習得や現場に対応できる医療スタッフとなれるように教育してほしいなど、看護教育に関するものがあった。

考 察

1. 卒業後のキャリア形成

1) 卒業後の進学・資格取得状況

卒業生の進学率は28.4%で、山形県立保健医療短期大学の調査結果⁵⁾24.3%と同様であり、赤十字秋田短期大学の調査結果⁶⁾12.3%よりは高率であった。学科別では、第一看護学科は39.0%と第二看護学科の16.6%と比べ約2.3倍の進学率であったが、第一看護学科と第二看護学科には教育課程の違いがあり、第二看護学科は准看護師から看護師を目指し入学し、卒業後は看護師として働きたいという明確な目標を持っている者が多いからではないかと考えられる。

卒業後に学位を取得した者は、学士号38名、修士号11名であり、大庭ら⁷⁾の調査でも、短大卒業生の進学希望者の割合が高いという結果と同様にキャリアアップ志向が高いことがうかがえる。短期大学卒業生の進学の受け入れ先である看護系大学は増加し、それに伴い大学院も増加していることや働きながら学習できる制度もあることから、今後ますますキャリアアップを図る卒業生が増加するのではないかと考えられる。

また、専攻科・専門学校に進学して保健師の資格を取得した者が35.0%、助産師の資格を取得した者が17.5%と多く、進学者の52.5%を占めていた。これは、専攻科が愛媛県立医療技術短期大学に併設されていた

ため、保健師・助産師の資格が取得できたことから、進学への意識が高かったのではないかと考えられる。

卒業後に新たな資格を取得した者は29.8%で、神戸市看護大学短期大学部の調査結果⁹⁾32.9%とほぼ同様であった。複数の資格を取得した者が25.9%おり、最大5つの資格を取得した者もあり、自分の職業に対する専門性を高めようと積極的に努力している卒業生の姿がうかがえる。また、ケアマネージャー・認定看護師・糖尿病療養指導士など働きながら取得した卒業生が多く、専門領域でのキャリア形成志向が強いことが推測される。

また、日本看護協会が1995年に発足させた認定看護師の資格を持つものが5名おり、特定の分野において専門的な知識と熟練した看護技術を実践する看護師としてキャリアアップしている。認定看護分野が増加していることから、今後も認定看護師の資格をもつ卒業生が増えることが推測される。

臨床で、看護研究を体験した者は約44%と低く、新見公立短期大学の実態調査⁹⁾37.3%とほぼ同様の結果であった。卒後10年経っても1度も研究発表をしたことがない者もあり、個人差が大きいことが明らかとなった。また、約70%が看護師として研究発表を行っており、臨床経験が長くなるにつれて研究発表を行う機会が増えていることも明らかとなった。研究に取り組んでいる時の相談者は、院内のスタッフであることが多いのが現状であり、平松ら¹⁰⁾によると、院内に研究専門のアドバイザーがないという実態を明らかにしており、臨床では研究のサポート体制が整っていないという現状がある。また、「研究支援」に対する本学へのニーズもあり、卒業生の研究活動を支援・相談できるような体制を作っていくことが重要であると考えられる。

2) 今後の進学・資格取得希望

今後何らかの資格等の取得や進学を希望している者は33.8%おり、取得を希望する資格としては、保健師、助産師、精神保健福祉士、糖尿病療養指導士、認定看護師などで、自分の専門分野でのキャリアアップをしようとしている姿勢がうかがえ、健康を取り巻く社会の変化に対応できるものである。このように学ぶ意欲の高い卒業生に対して、本学においてもリカレント教育の場として卒業生に対する受け入れを今後検討していく必要があると考える。

また、今後進学を希望している者は12.4%で、その内訳は大学36.8%、修士課程22.8%、専攻科17.5%、博士課程12.3%で、看護職として高度な専門的能力を高めようとする姿勢が推測できる。

2. 本学に対する期待

本学に対するニーズで高かったものは、「看護の情報発信」、「進路相談」、「学習会の開催」、「リカレント教育」といった卒業後も継続して幅広い知識を身につけることを望んでいる。また、卒業生の進学状況からも自己成長に対する高い意識がうかがえる。今川ら¹¹⁾が卒業生は母校を学びのより所としていると述べているように、キャリアアップ志向の高い卒業生も本学に対して学びの拠点としての役割を求めていることが明らかとなった。専門職として卒業後も継続して学べる機会があるということは看護の質向上につながるので、学びたいときに学べる場として本学を整えておくことが大切であると考えられる。卒後教育に関しては、勤務施設や、看護協会などの職能団体、都道府県・国レベルで実施されているが、その数は少なく、学びたいときに、学びたい内容が整っているとは限らない。卒業後に本学がどのように利用可能であるか、本学で実施される公開講座・相談窓口事業などホームページなどを利用してアピールしているが、もっと積極的に取り組んでいく必要があると考える。「実践活動の支援」、「研究支援」など、日々の実践活動に対する期待も大きく、日々の実践活動で困っていることをいつでも、気軽に相談できる体制を整えていくことも重要な課題であると考えられる。

また、就職時に技術や知識が十分に修得できていないことに困っており、臨床ですぐに役に立つ技術や医学知識の充実など実践に役立つ教育内容を期待していることも明らかとなった。人々の健康と福祉の増進に寄与することができる実践者育成をめざす本学での実践能力を高めるための、講義・演習・実習のあり方を検討することも必要ではないかと考える。

引用文献

- 1) 社団法人日本看護協会(07/9/24):社団法人日本看護協会ニュースリリース「認定看護師」合格者909人、計3,383人 名称変更で専門看護師・認定看護師の全分野が広告可能に www.nurse.or.jp/home/opinion/newsrelease/2007pdf/20070801.pdf
- 2) 愛媛県立医療技術短期大学学生委員会(1993):卒業生・修了生の実態調査報告書—卒後教育の充実と大学教育発展の手がかりを求めて—。
- 3) 徳永なみじ, 中野静子, 黒田優子他(2003):卒業生の臨床看護実践能力—卒業後2年間の変化—, 愛媛県立医療技術短期大学紀要, 16, 39-47.
- 4) 矢野紀子, 徳永なみじ, 野村美江他(2008):愛媛県立医療技術短期大学看護学科卒業生の動向(第1報)—職業定着と職業継続意思—, 愛媛県立医療技術大学紀要, 4(1), 43-49.

- 5) 遠藤恵子, 佐藤幸子, 青木実枝他(2004): 山形県保健医療短期大学看護学科卒業生の動向(第1報)ー卒業生の実態と看護技術演習に対する評価ー, 山形県立保健医療研究, 7, 49-56.
- 6) 伊藤美奈加, 大高恵美, 牟田能子他(2006): 日本赤十字秋田短期大学看護学科卒業生の動向調査(第1報)ー卒業生の就業・進学状況と卒後の資格取得の状態ー, 日本赤十字秋田短期大学紀要, 11, 67-74.
- 7) 大庭純子, 福島真由美, 三輪理恵他(2003): 現場で勤務する看護職の大学進学・継続教育に関する意識調査: 第34回日本看護学会論文集(看護教育), 145-147.
- 8) 西浦郁絵, 中野智津子, 能川ケイ他(2005): 神戸市看護大学短期大学部卒業生の動向(Ⅱ)ー第1報卒業生の現状ー, 神戸市看護大学短期大学部紀要, 24, 91-99.
- 9) 岡宏美, 栗本和美, 木下香織他(2006): 看護基礎教育「看護研究」の卒後の研究活動への役立ちー過去5年間の卒業生を対象とした調査からー, 新見公立短期大学紀要, 27, 117-125.
- 10) 平松みどり, 河合敏子, 山田恵子他(2004): 臨床看護研究の支援体制を充実させるための取組ー研究に取組んだ看護師の面接から「阻害因子」を知るー, 第35回日本看護学会論文集(看護管理), 9-11.
- 11) 今川詢子, 長谷川真美, 中山久美子他(2000): 本学看護学科卒業生の動向調査ー卒業生の短期大学部への要望ー, 埼玉県立大学短期大学部紀要, 2, 89-96.

要 旨

愛媛県立医療技術短期大学の卒業生を対象に、卒業後のキャリア開発状況と本学に対する期待について調査を行った。483名(第一看護学科254名, 第二看護学科229名)のうち137名(28.4%)が卒業後に進学しており, 144名(29.8%)が何らかの資格を取得していた。今後, 163名(33.7%)が資格取得を予定しており, 60名(12.4%)が進学を希望して, キャリアアップを目指して積極的に取り組んでいる卒業生の姿勢が明らかとなった。本学に対しては, 「看護の情報発信」, 「リカレント教育」, 「学習会の開催」など自分自身をさらにキャリアアップするための学びの場としての役割を期待していた。

附 記

本調査に回答いただいた卒業生の皆様と, ご協力いただいた木蓮会理事の皆様ならびに本学事務局の皆様へ深く感謝いたします。なお, 本研究は愛媛県立医療技術大学平成18年度教育研究助成費により行った。